

千本杉ヒュッテ竣工60年



2022.11

氷ノ山、鉢伏山山域とACKU

- ▶ 兵庫県の最高峰
- ▶ 以前は交通不便で手つかずの自然と豪雪地域の魅力ある山域
- ▶ 戦前から神戸高商では将来のホームグラウンドとして着目
- ▶ 1925年（大正14年）筒台山岳会の三好毅一氏らが、横角野（鉢伏高原）でスキー、鉢伏山に縄シールで登頂
- ▶ 1950年（昭和25年）姫路高校の太田直之、保坂昌、川口俊幸氏らが、中村健治氏の案内で鉢伏山から氷ノ山を登山し、このとき大阪アルコウ会の旧千本杉ヒュッテに宿泊

山と人6号より（松本清、保坂昌）



小代越からの氷ノ山

中村健治氏（健さん）という人

- ▶ 美方郡美方町（鉢伏山の裏側）出身
- ▶ 美方郡村岡で大工の修行、旧千本杉ヒュッテの建設に従事
- ▶ これを機会に氷ノ山に親しむ
- ▶ 海軍舞鶴建築部に勤務、神鍋でスキー
- ▶ 戦後丹戸に定住し四季にわたり但馬の山を歩く
- ▶ 山とスキーに凝ったため「こったさん」と呼ばれる
- ▶ 「氷ノ山の主」「飛燕のごときクリスチャニア」「健さんが歩いたところが登山道になった」などの伝説

山と人13号より（寺倉誠二）



千本杉ヒュッテの健さん

大学の山小屋を持とう！（1950年頃）

- ▶ 全学を統合する山岳部が建設され・・・六甲台の人達もこの地域に関心を持ち・・・私たちの部が氷、鉢一帯にのさばってゆくうちにここに私たちの小屋を持とうという話が出てきた。
- ▶ 山頂の山小屋（尼工ヒュッテ）を買い取るか、小代越の下に新築するか。議論の末新築に傾いていった。
- ▶ 健さんに相談したところ、彼は敷地選定、平面図を作り神戸まで説明にきた。
- ▶ しかし、目的も資金も、そのような夢自体が私たちには過大であった。

山と人6号より（保坂昌）

大学の山小屋を持とう！（1960年頃）

- ▶ 「当時、名の知れた大学が北アルプスのどこかに山小屋を持っていた。したがって、神戸大学にも是非どんな粗末でもよいからほしいというのが念願であった。」

山と人9号 「千本杉ヒュッテの思い出」 西村勝比古山岳部長

- ▶ 西村先生は学生部長であったときから、大学が山小屋を持つことに積極的であった。
- ▶ 当時の高木正孝山岳部長や山岳部員も山小屋の必要性を感じていた。

高木正孝山岳部長と谷川岳・虹芝寮

- ▶ 成蹊高校山岳部時代に谷川岳に虹芝寮を建設された経験がある（1932年9月15日開寮）
- ▶ 以後この小屋を根拠地に谷川岳一ノ倉沢、幽の沢を開拓（有名な一ノ倉沢奥壁積雪期初登は1933年12月）

ACKUニュース40号

- ▶ 「根拠地（虹芝寮）をようやく建設した私たちは、それ以後というものには全力を挙げ、若き血と汗を傾けて谷川岳東面の沢や壁に立ち向かった」

山と人16号より（田中信行）



昭和7年9月15日虹芝寮開寮式、山岳部委員長の故高木正孝先生。演台は炊事の流し（撮影は三枝氏）

高木正孝山岳部長と千本杉ヒュッテ

- ▶ 「山岳部がやらねばならないことは、OBの組織化、ルームを作ること、山小屋を作ること、次は君！海外遠征だよ」
- ▶ 山小屋を拠点として豊富な雪山生活をより安全に体験する。自ずとスキー技術を手始めに冰雪技術の質の向上が促され、同時に仲間意識も高揚し、これらの貴重な積み重ねは部の伝統づくりそのものとなる。そして現役による海外遠征も夢ではなくなるであろう
- ▶ 高木先生は虹芝寮と千本杉ヒュッテ建設が二重写しになっていたのではないかと想像される

山と人16号より（田中信行）



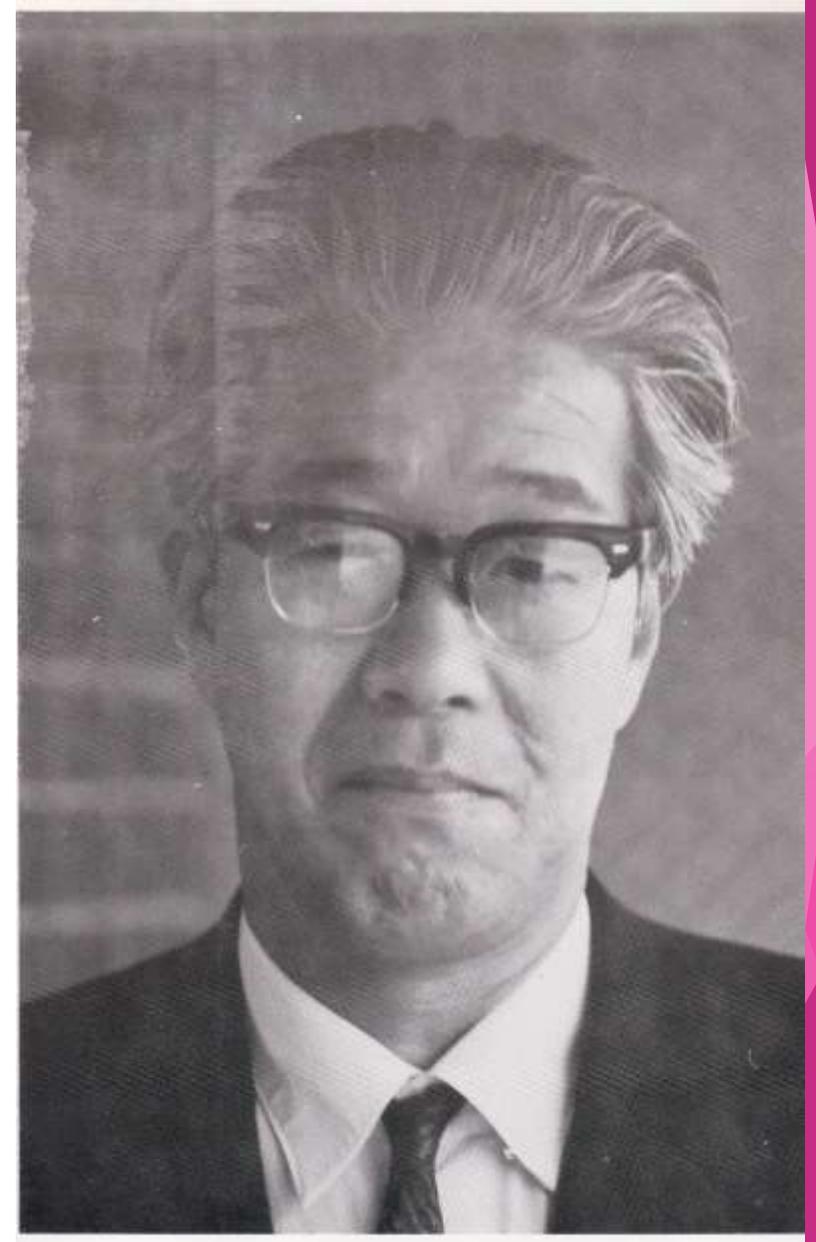
昭和36年12月 氷の山にて
高木正孝部長

立山弥陀ヶ原弘法小屋から氷ノ山へ

- ▶ 195?年学校登山で立山へ（林市雄OBがコーチとして同行）
- ▶ 室堂までのバス道開通により、弥陀ヶ原の弘法小屋の利用価値が下がり、10万円?で売りに出ているという情報
- ▶ 1960年西村学生部長、高木山岳部長らが交渉に行くが、価格面で折り合わず?ディスカウントを待つうちに立ち消えに
- ▶ 1961年2月ごろに中村健治氏より、大阪アルコウ会が旧千本杉ヒュッテを無償で神戸大学に譲渡したいとの申し出があったと連絡
- ▶ 氷ノ山という馴染んだ地域であり話が進み、旧ヒュッテは大阪アルコウ会から山岳部へ譲渡を受けることになった

西村勝比古先生

- ▶ 学生部長として神戸大学が山小屋（千本杉ヒュッテや鹿島のワングルヒュッテも）を持つことに大きな働きをされた。
- ▶ 高木山岳部長と仲が良く、南太平洋への学術調査出発時に山岳部のことをよろしく頼むと託された
- ▶ 1966年から山岳部長



大阪アルコウ会の旧千本杉ヒュッテ

- ▶ 旧ヒュッテは下の千本杉の林の中、東尾根上に在った
- ▶ 1961年5月に旧ヒュッテを調査するも、基礎が腐っていたことが確認された
- ▶ 修復では持たないとの結論。
- ▶ 結局、中村健治氏の提案により旧ヒュッテから南へ100mの大段平と東尾根登山道分岐点の現在の位置に新設することとなった。沢水が利用できることも決め手に

山と人19号 林市雄



尼工ヒュツテの怪

- ▶ 旧ヒュツテ調査時、中村健治氏ほかOB 4 名が上がったおり、頂上にあった尼崎工業高校の山小屋（尼工ヒュツテ）に立ち寄り休憩を行った。その後下山したが、直後に頂上に至ったパーティーが尼工ヒュツテが燃えていることを発見、通報した。
- ▶ 健さんとOBらは確実に火の始末を行ったはずであるが、犯人であるとの証拠はないものの状況から見て疑われても仕方ない。
- ▶ 尼崎工業高校には金一封と菓子折りをもってお見舞いした。

山と人19号より（林市雄）



左の黄色いのが尼工ヒュツテ 1998年

地元関宮町の要請

- ▶ 地元では登山者の安全や千本杉の保全のため、県下の国立大学である神戸大学に是非小屋を作ってほしいとの意向
- ▶ 元々、戦前からこの山域に入り込んでいた神戸大学には特に親密感が強かった
- ▶ 国立大学ということと、地元民と親しいOBの方々が居たということが地元に安心感を与えたと思われる

営林局の天然杉伐採許可の交渉

- ▶ 小屋建設と伐採には国有林であったことから営林局の許可が必要であった
- ▶ 大学側の主張 ⇒ 氷ノ山のシンボルである千本杉をはじめ森林を守るためにもヒュッテが必要である。但し、ヒュッテ建設費を下げるために現地の千本杉を用材として利用したい
- ▶ 営林局課長「矛盾した、ちょっと虫のいい話では・・・」
- ▶ たまたま高木部長の近所の郵便局長の実兄が大阪営林局長だったので、そのつてで交渉
- ▶ 営林局長「大所高所から見ればヒュッテがあることが森林の保護につながる」
- ▶ 営林局長の鶴の一声で小屋建設と伐採許可が得られた



建設工事

- ▶ 1961年8月、第一陣として現役部員が現地に入り、テント生活をしながら整地作業を行う
- ▶ 資材は部員やOBらがすべてを丹戸からボツカ
- ▶ 躯体材は千本杉を利用し総天然杉造りのヒュッテとなる。
- ▶ 現地に自生する千本杉、学名「アシウスギ」は雪に強く、豪雪に晒されながらも60年を経て立派に立っている
(1975年に天然記念物となり今では伐採できない)
- ▶ この天然杉を伐採して、大工の健さんが製材機で製材した。その際右手薬指を切断する事故
- ▶ この小屋が風雪に耐えてきたのも優れた用材と大工としての健さんの匠の技の賜物

建設工事

現役を中心とした労働奉仕は延べ人数450名に及んだ

建設工事はわずか5か月で行われ、12月に概成した。

山と人16号 田中信行



建設工事

- ▶ 「竣工までには様々なことがあった・・・ペンキ塗りに励んで、重いストローブを荷揚げしたのも主として現役諸君の労力によるもので、大学と山岳部が一体となってできた汗の結晶である。
- ▶ 私がこれを書いたのは、ヒュッテができた当時の山岳部の努力をいつまでも忘れないでいただきたいため、そう簡単にできるものではないことを知っていただきたい。

山と人9号「千本杉ヒュッテの思い出」西村部長 より



千本杉ヒュッテの建設

1961年12月10日 落成式



1	高木	11	岡市	21	高橋	31	保坂	41	太田	51	土山
2	山上	12	原田	22	山形	32	小川	42	浜田	52	宇田
3	和田	13	鷺尾	23	東中	33	前田	43	龜島		
4	中村	14	鷲坂	24	大谷	34	山の内	44	齋藤		
5	中村	15	西戸	25	田中	35	林	45	丹波		
6	川越	16	寺倉	26	辻野	36	森山	46	東郷		
7	東	17	岩田	27	土橋	37	森田	47	夏原		
8	田中	18	山田	28	久永	38	金井	48	田中		
9	久保	19	田中	29	神村	39	円満	49	福本		
10	坂本	20	小川	30	岡田	40	川口	50	青木		



落成式出席者

氷ノ山・千本杉ヒュッテ竣工式（1961年12月10日）出席者60名（*注記）の名簿					作成；田中信行（11B）		
前1・2列目		前3列目		前4列目		最後列目	
①高木正孝（山岳部部長）	②山上博義（12T）	③和田正文（10E）	④中村健治（大工）	⑤中村健治氏長女	⑥川越靖廣（12J）	⑦東 博（12P）	⑧田中信行（11B）
⑨久保谷幹夫（10E）	⑩坂本 亨（11T）	⑪岡市敏治（11T）	⑫原田 聰（12P）	⑬鷺尾孝二（12E）	⑭壺阪祐三（11T）	⑮西戸 勲（10T）	⑯寺倉誠二（12T）
⑰岩田修造（3S）	⑱山中（学生課課長）	⑲田中 薫（山岳会会長）	⑳小川成吉（11T）	㉑高橋達夫（11E）	㉒山形俊二（10P）	㉓東中義明（12E）	㉔大谷誠二（13T）
㉕田中	㉖辻野純二	㉗土橋芳雄					
㉘久永	㉙神村 正（3P）	㉚岡田健宏（9B）	㉛小川	㉜前田精三（7B）	㉝林 市雄（7S）	㉞森山康弘（4T）	㉟円満字正和（旧23）
㊱浜田多喜男（9J）	㊲東郷賢治（7P）	㊳田中俊甫（10P）	㊴青木	㊵土山尚彦（13S）	㊶宇田宏成（10B）		
㊷保坂 昌（1J）	㊸山内敦人（4J）	㊹森田 暁（3E）	㊺金井健二（2B）	㊻川口俊幸（2P）	㊼太田直文（1B）	㊽亀島 宏（1P）	㊾斎藤正利（7P）
㊿丹波 洋（6E）	㊽夏原政雄（9J）	㊾福本桂三（9B）					
（*注記）「山と人6号」（1961年エッセイ特集号）に竣工式写真と透明紙名簿が綴じこまれています。							
透明紙名簿には番号（No.1からNo.52）のない出席者が8名あります。従って合計60名の出席者となります。							
現役の山岳部員が21名（10回生から13回生）、ACKU会員が20名（旧23回生から9回生）及び							
田中薫会長、高木正孝部長、山中学生課長、中村健治氏（地元大工）とご息女の46名を上記表にリストアップしました。							
番号・氏名がありながら所属を特定できなかった方が6名ありました。							

大学への移管

- ▶ 学生課の山中課長補佐のアドバイス 「建物は建設後の維持管理がいかに大変か。山岳会だけで負担できるのか？ 大学＝国にそっくりり寄贈してしまうのが得策」
- ▶ 建設費用は大部分が山岳会OBとその勤務先からの寄付、現地労働もすべて山岳部山岳会が負っていたことから、大学に寄贈することに山岳会から抵抗があった。
- ▶ 山岳会が自由に使えるという条件で大学に寄贈することが一番いいと山岳会総会で説得した結果寄贈することとなった
- ▶ もしこの時寄贈されずに山岳会が所有していたら、とうに維持管理ができずに朽ち果てていただろう
- ▶ このヒュッテの維持に投じられた国費はいかほどになるだろうか

山と人19号より（林市雄）

当時の大学新聞



ヒュッテの利用（山岳部合宿 1963年9月）



ヒュッテの利用（山岳部合宿 1966年5月）

神戸大学千本杉
ヒュッテの看板
は、小林喜楽学
長の揮毫



ヒュッテの利用（スキー合宿）

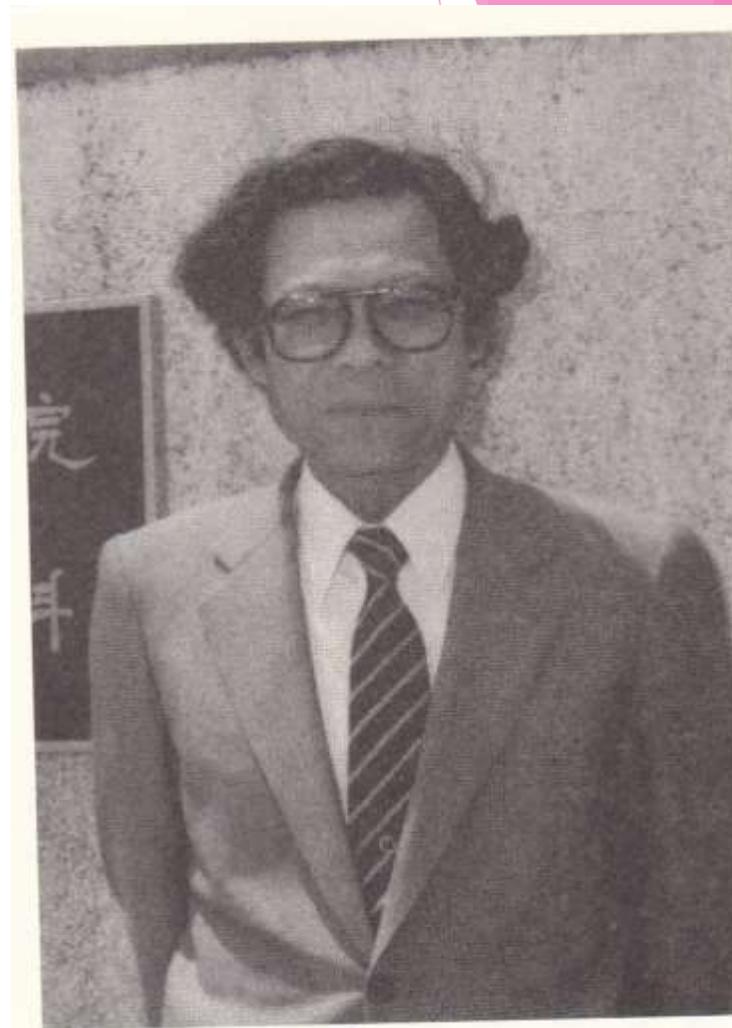
- ◆ 1965年前後の数年間、学校行事として一般学生を対象にスキー合宿が行われた。
- ◆ 毎回人気で40名近くの一般学生が東尾根をスキーを担いでヒュッテに登った
- ◆ 山岳部員は食料などボツカ
- ◆ 小屋に着くなりぶっ倒れるものもいたとか
- ◆ 本当の自然の中で、山小屋で生活し、自分たちで飯を作って食べるという、一般のスキーツアーでは味わえないものがあった。
- ◆ 今の学生にはできないのでは？

山と人19号より（八田義一）



中西哲先生とヒュッテ

- 1962年6月に大学主催で一般学生対象に開催された「氷ノ山バスツアー」に西村勝比古先生が、当時助教授として赴任されたばかりの中西哲先生を引っ張り込んで、氷ノ山の植物について現地指導を行わせた。
- これをきっかけに山岳部と関係を持つようになり、
 - 1963年 台湾学術調査隊の副隊長
 - 1968年 アラスカ・ユーコン学術登山隊隊長
 - 1986年 神戸大学チベット学術登山隊実行委員長を引き受けられた
- また西村山岳部長の後を引き継いで、1977年山岳部長に就任



昭和56年頃の中西哲先生

中西哲先生とヒュッテ



図4 氷ノ山のブナ林調査(1974年)。中央は中西哲教授

横山千秋先生とヒュッテ

- 「乗鞍のプリンス」とあだ名される
- 乗鞍岳にある東大宇宙線研究所に1952年から務められ、その間山スキー技術を磨かれた
- また、当時の皇太子（現在の皇陛下）と誕生日が同日ほぼ同時刻（県から表彰されたとか）
- 1970年ごろからは山岳部のほとんどの部員が山スキーを一から教えてもらっていた
- 氷ノ山で行われたスキーバスのコーチ
- ヒュッテの沢の水を「清酒千本杉」と称し、まるで酒のように飲まれたとか（当時はヒュッテで酒はご法度）
- それを見ていたスキーバスの学生たちはすっかり騙されていた？
- 1997年2月 横山先生退官記念登山はヒュッテで行われた



1987.5.03 氷ノ山への途上の横山先生

千本杉ヒュッテとねむの木山荘

- ▶ 千本杉ヒュッテが完成したとき、私たちは絶好のたまり場ができたことを喜んだ。しかし就職して7, 8年のころ、仕事に追われ、結婚、子供ができ、なかなかヒュッテまで出かける時間がない。
- ▶ わりに行きやすい横角野（八千高原）に自分らの小屋を持ちたい。夢は膨らんでいった（保坂、高田誠、・・・）
- ▶ 健さんから「土地が手に入りそうだ」
- ▶ 万博が近づいて建設費が高騰するかもしれない ⇒ 借金して建てる決断
- ▶ 1968年に完成

山と人13号 保坂昌

- ▶ 現在も和光会員らが管理人として運営し、現役部員らが千本杉ヒュッテからぶん回しを下ってねむの木山荘に受け入れてもらっている

忘れられたヒュッテと解体の危機

- ▶ ヒュッテ建設から年月が経ち、1970年代に入ると、建設に従事した年代の人たちが社会人として活躍するにつれ、ヒュッテを訪れる人たちが減っていった。
- ▶ 学生課「5, 6年前台風の影響を受けたので改修工事を行った。応急修理は毎年行っている。小屋の建て替えは当分必要ない。文部省へ報告の必要があり、昨年度の利用者は35人と報告したが、実際は十人前後と推測している。一方ワングルの鹿島鎗小屋は150人と利用者は多い」
- ▶ さみしい思いがするが、岩とか氷雪の魅力の乏しく、電気やガス設備もなく、現役部員も少ない昨今の状況下ではこの現状を肯定せざるを得ないのか

山と人16号より (田中信行)



1985年2月ごろ

但馬高原林道と氷ノ山国際スキー場

- ▶ 1980年頃に兵庫県が大規模林道（但馬高原林道）を建設
- ▶ 村岡～瀨川山～八チ北高原～八チ高原～大久保～大段平～戸倉
- ▶ 無雪期はヒュッテから至近の大段平まで自動車で登ることができるようになり格段にヒュッテに登りやすくなった
- ▶ 1985年頃に福定の対岸の段々畑のところ、氷ノ山国際スキー場としてオープン
- ▶ 東尾根基部までリフトが使えるようになり、積雪期もヒュッテに入ることが容易となった
- ▶ これらの出来事は、忘れられたヒュッテが思い出される転機となった

大改修とテラスの増設

- ▶ 1998年の大改修の前に大学からあまり使われていないようなので、廃却の方向で検討もしなければならぬとの話が出てきたとき、山岳部山岳会のなかから、なんとしても改修して維持しようとの意思が出てきたのは嬉しい限りであった
山と人19号より（林市雄）
- ▶ 建設から約40年が経過し、建設当時に現役学生であった人たちは、ちょうど会社を定年退職するタイミングになっていた。大改修に立ち上がったのはこのようなヒュッテに強い思い入れがある人達だった
- ▶ 改修工事やテラス増設の資材は約5トンに及び、総勢136名が大段平から担ぎあげた
- ▶ 大段平から短い角材なら二本、長い角材は一本を背負って千本杉ヒュッテまでの林道を何度も行き来しました。夏の暑さの中、首にかけた手ぬぐいはすぐにビショビショになりました。息を切らせながら、それでも「お役に立っている」という感覚が背中を後押ししてくれました。
山と人19号より（中村千春）

2000年9月30日 改修工事竣工式

大学当局、地元代表者、施工業者、ACKU関係者など56名が参加した



2000年9月3日 改修工事竣工式

神戸大学氷ノ山体育所の看板

- ▶ ヒュッテの改修工事に先駆けて、1998年12月に西塚泰美学長から「神戸大学氷ノ山体育所」の看板の揮毫をいただいた。
- ▶ 1階の正面の壁に取り付け
- ▶ ステンレス製のミニチュアも外壁に設置

山と人19号より（中村千春）



山岳会例会への組み込み

- ▶ ACKUの例会は1996年からはじまった。千本杉ヒュッテは毎年の春のスキーツアー、夏秋の小屋整備を兼ねての山行で利用した
- ▶ いつものパターンでは前日にねむの木山荘に泊まり、・・・国際スキー場のリフト終点から「戦い」が始まる。重い食料は現役が持つが、ちょっとした軽いものは持たされる
- ▶ 東尾根避難小屋までは皆一緒、問題はその後の急登と一の谷のジグザグで体力と装備の差が出る。1時間強の遅れとなる。しかし小屋に着けば「お疲れさん」のことばが迎えてくれる
- ▶ 精々ストーブの「番」ぐらいでもっぱら「飲む」ばかりである。山の話、とっておきのバカ話、スキー談義、現役部員の自己紹介などエンドレスに続く
- ▶ 小生は言ったことがないが「今何時や」という声で「明日の予定」をリーダーの金井良、緒方、矢崎なりが天候、参加者の技量と体調を見て決めてくれる。突っ込みも入る。これがまた面白い。

山と人19号（高田和三）

ニセ甌岩とリングワンデリングの怪

- ▶ 2011年3月頂上から甌岩を巻くいつものルートを下った。視界はほとんどなし、2, 3分滑ったところからいつものように左へ回り込んだ。下ると深雪となりラッセルとなる。当然馬力のあるトップは山田である。
- ▶ しばらくするうちに「下りすぎや、もっと左や」と皆が言い出した。その時岩らしきものが前方尾根上部に微かに見えた。下りすぎたかと登り始める。矢崎が尾根上に偵察に行ったが現在位置がわからない。
- ▶ その時である、一番ケツに居た井上がやおらGPSを取り出して指示を出してくれた。
- ▶ なんと登りついた左手には頂上南側のバイオトイレのある展望棟にぶち当たった。GPSの威力は素晴らしい。その時の山田のしかつめらしい顔はその後見たことがない。
- ▶ 頂上を時計と逆回りで一周したことになる。当然この時は東尾根から下った 山と人19号より (高田和三)



緑：正規ルート 赤：リングワンデリング

竣工50周年記念イベント

- 2011年10月16日 現地においてヒュッテ竣工50周年記念イベントが行われた
- 大学当局、地元関宮町長、武田義明教授（中西先生の弟子でクーラカンリ隊員）、ACKU関係者ら38名が参加
- 福田秀樹学長祝辞（代読中満学生支援課職員）
「青春時代の多感な時期に山小屋に宿泊して静かに自然と自分を見つめることのできる機会は大変貴重です。多くの登山者が立ち寄りデッキで休んでいかれるそうで、神戸大学の山小屋がお役に立っていることもうれしい限りです」
- 岡市会員によるヒュッテ建設の経緯の披露
- 武田教授による氷ノ山の植生について講演があった

ACKUニュース37号より



千本杉ヒュッテ竣工50周年 集合写真

中国地質大学（武漢）との合同登山

2014年4月 中国地質大学（武漢）の副学長以下8名が来神し、2015年の百周年記念合同登山の打ち合わせを行った

そのうち6名が氷ノ山交流登山に参加

日本の雪山を楽しんだ



氷ノ山頂上にて4月7日朝

中国地質大学（武漢）との合同登山



下の千本から上の千本に上がる
中国チーム



ヒュッテでくつろぐ董范（左）と牛小洪
ロプチンの中国側隊長と副隊長

山岳部百周年記念事業の改修

- ▶ 2014年度 5月～6月
- ▶ ヒュッテ躯体のジャッキアップ、土間コン打設、トイレ改修など
- ▶ 延べ65人の資材ボッカ 総額116万円
- ▶ 4名の女子部員も40kgのボッカを行ったが、その後すべて退部して居なくなった



改修工事参加者

平 果麟	先田智也	松浦風沙	榊原る衣	加藤礼示	山本浩輔	松村政則	山田 健	和光広典	井上達男	河本卓生	高田和三	田中俊甫	古橋 惇
	松崎壮吾	唐木敦生	高橋 香	井部良太	松村健司	山本恵昭	長谷川浩	居谷千春	白形 洋	金井良碩	鶴谷将俊	土山尚彦	壺阪裕三

一般利用者への開放

学生支援課の氷ノ山体育所の利用の考え方⇒
利用は学内関係者と神戸大学のOB、高校体育
連盟など公的な行事参加者、遭難時の緊急使
用に限っていた

しかし、一般登山者からの利用についての希
望が多く、ヒュッテの一般利用により協力金
が入るし、利用することで老朽化を防ぐこと
ができる

2017年ごろ、学生支援課と協議し一般登山者
から希望があれば受け入れることとなった

2019年3月には日本山岳会関西支部のメン
バーが大挙してヒュッテに宿泊した

現在では年間30人程度の一般利用がある



山岳会の管理業務受託

- ▶ 2019年に学生支援課から相談
- ▶ 長年管理業務を委託してきた鵜縄地区の片芝氏から、もう続けることができないと申し出があった
- ▶ ついては山岳会で受託してもらえないか
- ▶ 条件 5月～11月に月1回の点検 報酬は1回11,000円 報告書提出など
- ▶ 理事会に諮り、受託することとした

実施にあたり、希望者を募って実施者には実費として1回6,000円を受領して もらい、山岳会ヒュッテ会計に5,000円を入れてもらうことを決定

- ▶ これにより、年間35,000円がヒュッテ会計に入ることになり、維持管理が一般会計からの補助を入れずに行えるようになった

ACKUニュース43号より (山田健)

ヒュッテがあったからこそ

- ▶ 福定で民宿を営む 西村義雄氏（健さん亡き後の氷ノ山の主）の話
- ▶ 多くの登山者がこのヒュッテがあったことでどれほど救われたことか
- ▶ あの山に県下の国立大学である神戸大学が小屋を持っていて、キッチンと維持されていることが、地元にとってどれほどありがたいことか

山と人19号より（林市雄）

- ▶ 2021年、地元の養父市消防局（遭難者保護の役割）と神戸大学との間で、遭難救助のためのヒュッテの緊急時利用の協定を結んだ（山岳会が仲介した）
- ▶ 「春夏秋冬、このヒュッテをベースに多くの岳人が育ちました。頂点であるヒマラヤ未踏峰の登頂もここからの出発であることは間違いありません。現役諸君にはこのヒュッテの利用と維持を引き継いでゆくことが建設当時の諸先輩からの願いでもあり、輝かしい神戸大学の学術登山やフィールドワークの継続に貢献することでもあります。」 50周年記念式典井上達男会長挨拶より

近年の豪雪によるヒュッテの傷み

近年の大雪とヒュッテの老朽化が相まって屋根やテラスの破損が目立つようになってきた



2022年3月7日 大雪で完全に埋まったヒュッテ
テラスが雪の重みで破損した

ヒュッテのこれから

- ▶ いつかは使えなくなってしまう。その時どうするか？
- ▶ 将来ヒュッテを建て替えようとなったとき、大学内でそれを合意形成するためには、ヒュッテの利用価値をアピールできなければならない。
- ▶ 利用を増やす必要があり、学内では授業や研究に活用されること、学外では遭難対策や高体連活動のベースなど
- ▶ 宣伝広報活動が必要である
- ▶ 建設費は寄付に頼らざるを得ない（大学からは立替費用の負担はできないだろう）

山と人19号より 学生支援課

山岳会としてできることは？